

関連項目：指導体制プラン①、③

複雑化する要支援児をチームでサポートする

目的

支援を要する児童の実態からその対応について考えた時に、不登校傾向・教室を飛び出す等の授業不適応・軽度発達障害等への支援を分けて考えられない状況（支援内容の複雑化；右図参照）がありました。そこで、組織力と専門性を高めてこれらの児童に対応することにしました。



内容

● 「サポート会議（担当教員連絡会）」の開催

生徒指導上の課題や特別支援教育の観点から、本校には次の教員が配置されています。

- ・ ハートアドバイザー
- ・ 特別支援教育支援員
- ・ 特別支援教育サポーター

また、主幹教諭配置に伴う学校運営対応としての非常勤講師が加配され、分掌上、別室登校児童に関わる相談室補助教員としても勤務しています。これらの教員には学校の課題解決に向けた積極的な取組が期待されますが、勤務時間の都合から放課後に行う会議に参加できなかったり、学級担任との相談時間がとれにくかったりする状況があり、連携を十分に深めての実践がしにくいという課題がありました。

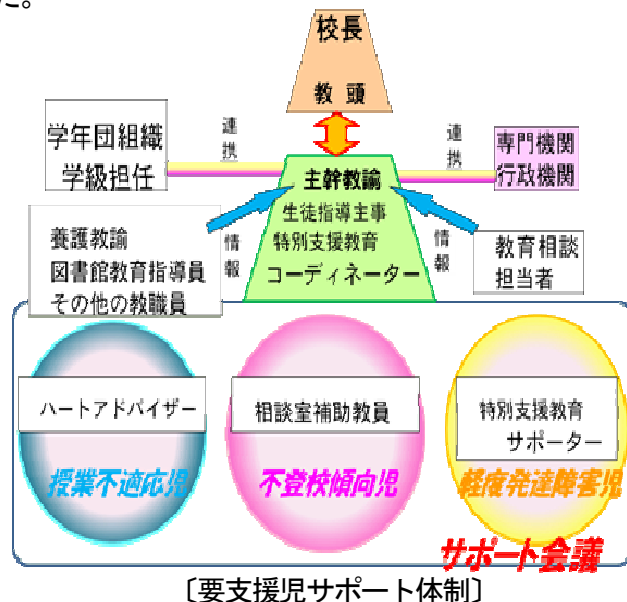
そこで、これらの教員が児童について情報交換し、対応について検討する「サポート会議」を隔週で開催することにしました。この会議は、生徒指導主事や特別支援コーディネーター・学級担任等と連絡調整しやすい主幹教諭が中心になって運営し、参加者どうしが自分の経験をもとにアドバイスし合う等、専門性を高めることにつながりました。また、学校組織内のチームメンバーという意識を高めて児童に関わることにもつながりました。

● 連携を深める「小さな連絡カード」の利用

支援児童の状況を担当者から担任に伝える手段として、「小さな連絡カード」を利用しました。このカードは、担当教員の関わりや児童の変容を簡単に記録するもので、担任との打合せ時間の不足を補うものになりました。また、担任が気付かなかった児童のよさを知るという大きな効果もありました。

● 児童個別支援委員会の開催

生徒指導上の問題等、個別に支援（配慮）を要する児童について理解するための会を全教職員が参加して行いました。



〔要支援児サポート体制〕

成果

こうした取り組みをすることで、教室を飛び出す傾向のある児童が、自分で決めた時間内で落ち着いて授業を受けることができるようになっていました。また、年度初めから不登校になりつつあった児童が、1月からは毎日登校できるようになりました。

児童の学校不適応に対して、学級だけでなくチームで対応することが、学校生活に適應させることにつながるポイントであると確認できました。